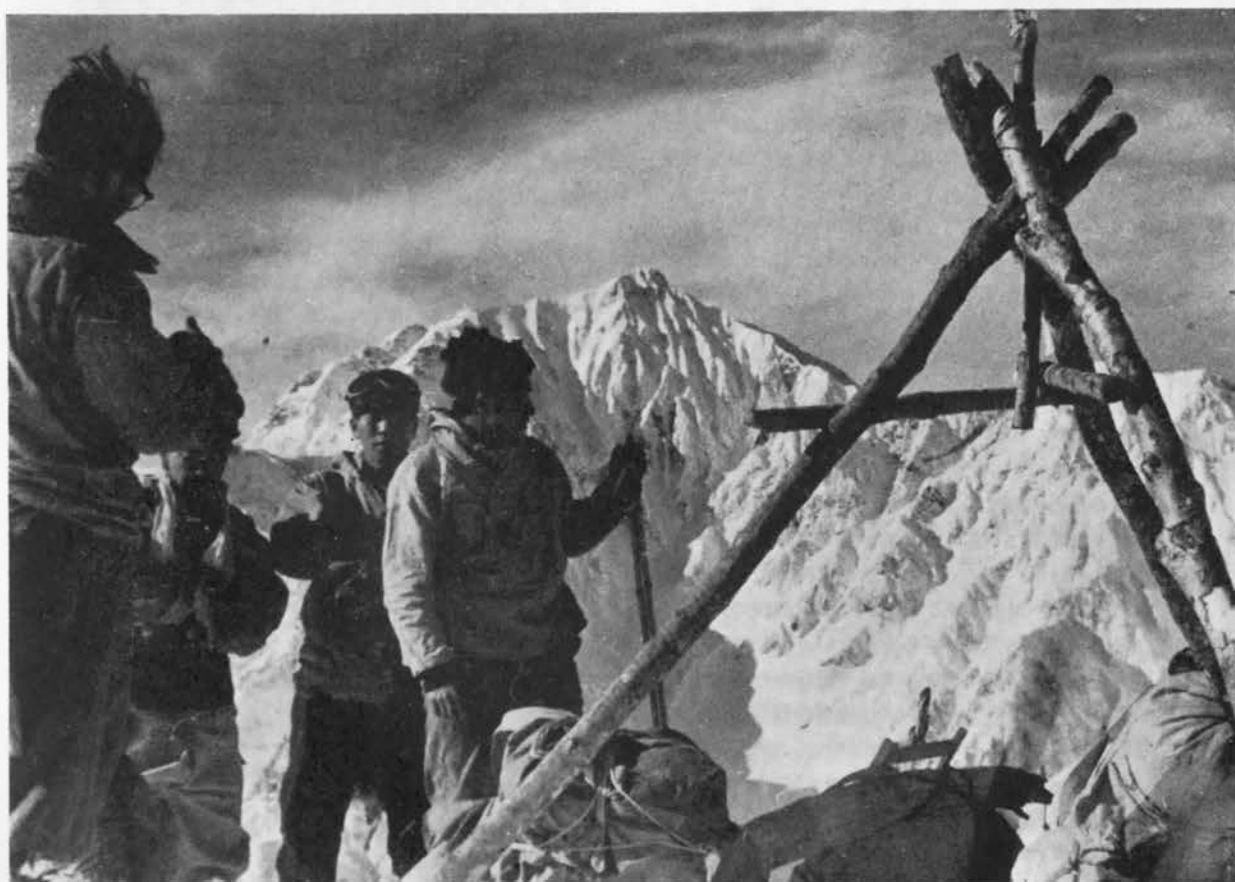


山と博物館

第 3 卷 第 2 号

1958年2月20日



小遠見にてひと休みする。背景は威容をほこる鹿島槍（大町山の会冬山合宿より）

大 町 山 岳 博 物 館

冬の遠見尾根合宿

大町山の会 福島融

行動表

キャンプ 行動日	大町	神城	遠見尾 根	中遠見	白岳	五竜岳
24		→				
25			←			
26				←		
27					←	
28						←
29	←					

基礎的な雪中訓練

昨秋、山博を中心とした「大町山の会」が誕生したのを機会に懸案だった冬山を計画したのがなかなかパーティが組めず、もたついたので思いきって目的をしまり、その重点を基礎的な雪中訓練に置いた。テーマに選んだ遠見尾根は冬山を初めて手がけるものゝ常識とまでいわれているポピュラーコースで、前記の目的を充分満してくれとともに隊員のほとんどが積雪季にこの山の経験をもっていた。隊員構成人員は6名で初日だけ参加した荷上げ手伝いを入れれば実動人員は7名である。

CL (チーフリーダー) 福島融、SL (サブリーダー) 松沢宗洋、食糧係 柳沢幸治、器具係 武田隆男、会計係 高橋秀男、記録係 太田昌秀、竹内剛久

行動は1月24日に起し、同26日に終了する予定でいたが天候急変のため実際は29日まで延ばされた。またこの計画を実行するにあたりあらかじめ、12月に下見を行った際、充分B・H (ベースハウス) として使用できると信じていた法大ヒュッテが薪不足とストーヴ故障のため一夜限りで遠見小舎へ引越さざるをえないうきめにあった

その他大遠見直下のキャンプサイド設定から設営器具の一部デポー、翌日の入天、および雪洞の設営まで計画通り順調に進んだが、その後天候が崩れて、吹雪に見舞われ、遂に五竜岳アタックはあきらめねばならなかったが初期の目的は充分果せたものと信ずる。――

この企画に当り行動をとともにした隊員諸君の協力と、種々援助して下さった博物館の方々に心から感謝するとともに責任者として至らなかつた点おわびする。今後このさゝやかな試みを母胎としてより山への関心を深めたいものである。

ラッセルは思ったより難行

1月24日小雪、大町発7時の超満員列車で神城へ向うもTは例の如く発車まぎわまで姿をみせず全員をいらだたす。神城駅下車の際、Fのストックを車内に置かれる。

仕方なく遠見小舎経営者宅へ挨拶方々寄ってスベアーを拝借、ようやく出発、全員平均荷重量はスキーぬきで35kgをこえているので急坂の新雪ラッセルなどは多分に行動が鈍ると考え思い切ってスキー場小舎へ60kg程度荷し、明日再び取りに下る事にして、先を急ぐ。ラッセルは思ったより深くなかなかはかどらず難行するが、昼食後より二人一組となり置荷しては空身でラッセルピッチを上げ、そのシユプールを荷をかついだものがいく方法をとった結果、案外能率を上げる事が出来た。ただし午後より降り出した雪は風も加わり、登るに従って積雪はいよいよ深く皆大分アゴの様子だったが予定より2時間ほど遅れて4時半法大ヒュッテへ入る事ができた。小舎は大分雪が吹込んではいたが結構使用出来た。だが薪の欠乏とストーヴの煙突の故障にはまったくへいこうした就寝後、夜半から吹き出した強風は小舎をゆすぶるほどで明日の天候が気づかわれた。

行動は順調に

25日晴、昨日とは打って変わった上天気、YとKは昨日の置荷をとりてスキー場まで往復、荷上げのUも都合で予定の下山、F、MとOの3人はB・C (ベースキャンプ) の設定と器具の荷上げおよびそこまでのラッセル、またTはハウスキーパーとして薪の豊富な遠見小舎への引越作業に専念する事にしたが天候の回復が幸してすべて順調に進んだ。すなわち、荷上げ班は1時までには全部置荷をかつぎ上げ、ラッセル班は大遠見直下の梅林にキャンプサイドを設定しテントその他の器具をデポー完了、3時にはハウスキーパーの用意してくれた遠見小舎へ帰投する事ができた。M及びFは入山前から気管支に少々痰傷を起していたが持参のコルゲン注射を運用して何とか持ちそうである。明日はいよいよB・C入天なので就寝を早める。明日の晴天を祈念しつゝ……

団体装備一覧

冬天幕 (カマボコ6人用) グランドシート、エアーマット、シユラフザック、スコップ、サブザック、ザイル、赤布、アイゼン、アイゼンバンド、ラジュース、コッフエル、シャモジ、飯合、カン切、テルモス、ガソリン、メタ、ローソク、ベンジン、ジョウゴ、携帯ラジオ、ヘッドライト、カイ中電灯、スキーワックス、ビニールテープ、ランタン、マジックインキ、予備電池、豆電球、馬ブラシ、ナイフ、カメラ、フィルム、マップ、磁石、ライター、ノゴギリ、ナタ、靴ヒモ、裁縫用具、保皮油、ワセリン、ベンチ、針金、笛、荷札、温度計

天候が激変

二十六日晴後吹雪 起床三時、部屋の中でもほろほろなど痛いほどだ。窓外は凍りついた星空が凄まじく冷たくきらめいている。五時には朝食をすませて荷造りを急ぐ。残念ながらスキーは置いてゆく事に決め、ワカン一本で行動する。六時半小舎を出発、いまだほの暗い中をワカンのステップだけがザックザックと快い、岳樺林を登り切った頃やっと御来光が拝まれた。

朝日に輝く連山の素晴らしい事は云うまでもないが、小遠見辺りから眼前に現れる鹿島槍の威容にはただただ圧倒されるばかりだ、名にしおう北壁、それに続いて裾を引くカクネ里、ゴツイ天狗尾根等々まったく男性的な一語に尽きる。昨日のラッセルが効を奏して行動は順調にはかどり、九時半頃デボー地点へつく、さっそくテントの設営をおこない、入天の喜びを分かち合う。直ぐ隣へ雪洞も掘ってトレーニングを行う。我々のサイドは大遠見山から少し下った小さな樺林の中で眼前に北壁、カクネ里をほしきまにする絶好の地点である。快い風呂の後、Oをテントキーパーに残して全員明日のアタック準備のため白岳直下までラッセルするも、途中より天候急変し風雪つゆのり白岳沢より引返す。三時半頃帰投、テントへもぐり込む、夕食の雑煮をタラ腹放り込んで、FとKは雪洞へ、残りはそのまゝテントで頑張る事に決める。吹雪はいよいよつゆのりテント班は除雪になやまされる。

アタックは断念

二十七日吹雪後曇 雪洞班は寝すごして入口を雪にふさがれる失敗を演じ失笑をかう。ようやくはい出しテントに合流、沈黙の覚悟を決める。外は依然として吹雪が激しく昨夜からの積雪量は大体一米も越えただろうか、時々除雪に精を出す。夕刻にいたりさしもの吹雪もようやくおさまり、鹿島槍や五竜岳もその姿を見せる様になる就寝近くには星空も散見できたが明日のアタックは断念し、徹収する事に決定する。

二十八日晴 皮肉にも朝から目の覚めるような快晴、盛んに登頂の誘惑にかられるが、自重して下山の用意をする。徹収作業も今回のトレーニング中重要な位置を占めているから皆張切っている。八時半頃には完全に荷物は各自の背中にかつがれ、サイドを後にしていた。この間やったラッセルは昨日の吹雪のため後形もなく吹き消され、我々の帰路をはばんだが何と言っても下りではあるし、ラッセルにもパーティーとして身についた感じだから自然ビッチも上り、十時頃には遠見小舎についてしまった。これでほぼ今回のスケジュールは完了したわけである。Oが都合下山しただけで他はスキー練習に半日をついやした。

二十九日晴、大変世話になった小舎を後に大きな荷物を

食品一覽

米、モチ、食パン、片栗粉、コッペパン、ミソパン
馬鈴薯、人参、ネギ、玉ネギ、キヤベツ、ホウレン
ソウ、ノリ罐、コンビーフ(小)、ロールキヤベツ
クジラ、サンマ罐(水煮)、イワシ罐(トマト煮)
サンマ罐(味付)、挑罐、ミカン罐、カンピョウ、
ワカメ、凍豆腐、竹輪、油揚、卵、塩、味噌、バター、
チーズ、醤油、味ノ素、即席カレー、小麦粉、
サトウ、豚肉、ソーセージ(魚、肉)ミカン、リンゴ、
コロガキ、羊カン、キヤラメル、チョコレート
茶、紅茶、ウキスキー(大・小)コンデンスミルク
ドライミルク、氷砂糖、カリントウ、塩センベイ

背負ってのスキー場までの急坂はかなりの技術を要するが、案の定、完走できたのは小谷出身のM一人だけだった事を付記しておこう。神城スキー場で風をすませ、一滑りした後、二時半の列車で大町に帰りこの合宿は無事終了したのである。

食糧 モチに飽きる

六日間にわたる食糧は加工の簡単な餅とパンを併用したが、パンは主に風呂に、餅はその他の時に用いた、そして米は若干だったがB・Hのみに限った、コンスターチや葛粉は案外喜ばれず、オートミルにいたっては調理方の関係も手伝って悪評をかった。野菜は手数をはぶくため、予め細かく切ったものを秤量し、それぞれビニールの袋に詰める方法をとったが非常に効果があった。又カン詰が少々多すぎた感じだったが、むしろ丸干やみりん干を多くした方が有効ではなからうか。紅茶はどんな時でも大変役立った。主食の餅とパンのバランスはもっとパンの方に片寄せた方が色々の面から有効であろうと思う。最後にビタミンについて一考を要する。今回は総合ビタミン剤を用いたが、隊員の中に歯ぐきから出血しているものが認められた。

器具装具 下着はせひ毛製品

テントはカマボコ型を使ったが借物の悲しさ、重過ぎて文句は云えぬが、何しろ一人かゝり切ってしまうには悲鳴を上げた。仕方なくこれに専用のジラルミン製骨子をあてた。ラジウスは二台用いたが、一台はほとんど使えぬ程故障し、又、スコップも米軍の放出のものは重過ぎて役に立たず荷になっただけだった。エアーマットは仲々快適で好評だった。個人装備はほとんど完璧に近いものだったが、特に下着には毛製品が絶対必要であろう。又オーバーボン、シューズ、ミット等は出来るだけ使いたいものである。毛製の帽子も吹雪の時など大変効果的だった。その他では一般に防水があまりよくなくアノラックや手袋など直ぐぬれてしまった。

信州文学碑散歩

(2)

大町南高等学校教諭 福沢武一

翠幹句碑 —伊那市中央区古町公園—

伊那市の市街地は天竜川をはさんで谷底に密集している。

天竜川と三峯(みぶ)川との流域が折りあうところ——その段丘の出鼻に遊園地がある。東大社(ひがしたいしや)・招魂社(しょうこんしや)、さては伊那球場のあるのもここだ。古町公園とよんでいる。ここからは、市街地の家並が見渡され、その背後に木曾山脈も仰がれる。

峡谷から台地へのぼりつめたところに句碑がある。少年時代から眺めている碑。それだけに愛着が深い。

ない袖もふりたき頃や桃の花 翠幹(すいかん)

少年時代に懐まれたただけであって、句意平明である。いさゝか俗受けがしないでもないが、ほのぼのとした一句の風韻はいままで捨てがたい。

碑は段丘べりに立ち、背中を南の陽にぬくぬくとあたためている。そのこともこの碑から切り離せない。——市街地、それをとりまく段丘群、そそり立つ山脈、……これらすべてが碑の生きた背景をなしている。桃の花が咲く頃の風物はなおさらのこと。僕が拓本にいった真冬の景色も碑をひき立てていた。峡谷のこまやかな物陰に

淡雪が消えのこって光っていた。

さて、こんど初めてつぶさに碑を点検した。碑句の作者は清奇園翠幹。市内上新田地籍を探訪中、その土地の出身であることを教えられた。いま生存しているとすれば、百才位になるということも。

碑の揮毫(きごう)は伊藤松宇氏。氏は本県小県郡上丸子の出身。俳文学の研究家としての業績が多いことは承知の通りである。磨かれた碑面に拓本は温雅な趣きにうただされてくる。筆致は句の和気とつりあっている。

ここ大町はいま雪が降りしきる。朝からの雪は小止みもない。今日は伊那も降っている。翠幹の句碑にも雪は積っているはず。でも、そこでは雪はたちまち消える。

南を受けたこの碑のほわりには、すでに春の息吹(いぶき)がうらうらと立っているように感ぜられる。

(一月下旬記)



碑の高さ一—一センチ、巾一—一メートル。座の高さは四九センチ。破陰に大正一—年四月、円熟社外有志と刻まれている。

日本のはくぶつかん

三重県立博物館

この博物館は昭和28年6月に開館しました。この資料は昭和26年、天皇陛下の行幸の際、三重県下の生物をおみせするために集められたものです。この資料を集めるには、それぞれの専門家の集りである三重生物調査委員会がつくれ、二年もかかって集めました。その結果、これを永久に記念保存しようという気運がもり上り、建設されたのが、この博物館である。だから最初は自然科学関係の標本が主であったが、県民一般の方の要望から人文科学、生活科学もとりまぜ総合博物館として誕生しました。全国にある200もの博物館の中で、総合的な県立博物館はわずか2~3ヶ所という非常にまれな価値の高い博物館となっている。場所は津市借楽公園(旧藩主藤堂侯の別荘で、ツツジ(コバノミツバツツジ)の名所)の入口、敷地1065坪、建物は本館鉄筋コンクリート二階

建て総工費2770万円もかかりました。人文関係は考古、歴史、美術方面もそれぞれ三重県に關したものを主に集め、展示してあります。自然科学関係では、三重県内の動植物の一応の調査が終り、標本の整備もだんだん進んでいます。この中でも古代生物化石は最も充実したもので、最近県下で発掘された旧象(ステゴドンおよびパラステゴドン)の化石は有名です。

常時展示のほか特別展は春秋2回、県民美術展を開いている。年間入館ならびに利用者総数は8万、この中有料入館者の約6割が津市内の市民という数字が出ています。館員は館長以下10名です

【三重県立博物館提供、写真は館員と博物館】



春をまつシダ植物

大町山岳博物館学芸員 中村武久

二月も終りに近くなると野山の草木も長い冬の眠りからさめ、ぼつぼつ春の芽生えの準備を始めたことだらういや正しくは、この長い冬の間も眠るどころか、來たる年にそなえて、たゆまず活動し続けていたのだ。

一望見渡す限り雪の野山、その真白な雪の下には今既に春の躍動が始まっている。

春になると柔らかい握りこぶしのような頭を上げるワラビやゼンマイ、これらのシダもその日のために土の中で小さな芽を伸ばし始めている。

秋の終り、木枯し吹きすさぶ頃、人目をばばかりの如く、山野の陰地に好んで生活するシダも、一年間の仕事を了え、精根尽して作り上げた胞子を播き終り、土の中に根と茎を残して地上の葉は静かにその生命を閉じて行く。これは丁度樹木の落葉と同じで、葉のつけねの所から上の部分が枯れ、やがて春の芽を生み出す土の中の部分はそのまま残るのが普通である。冬でも葉の枯れないものは多少あり、普通の植物のように根まで枯れてしまふ一年生というものはこのシダでは見られない。すなわちシダは樹木と同じで、やはり落葉するものと常緑のものがあると考へてよい。

樹木では秋に落葉すると、その上側のわきの所に小さな芽が作られる。シダも全く同様、葉が枯れる頃土の中に、または東生している葉の根元に若い芽が作られているのを良く見る。この若芽は一体何時頃作られるのだらうか。これは私の長い間の疑問である。と云うのは、ある程度年取った株では、それが春、夏、秋の区別なくいつも芽を藏している。特にオンシダやイノデのように東生

する株のものでは一層甚しい。ちなみに夏の頃成長した葉を刈り取るとすぐにまた新しい葉が生じて来る。

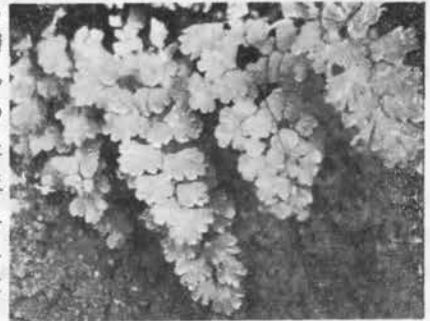
私の経験で、ミヤマクマワラビの

場合、年4回芽を出したものがある。勿論最初の葉のように良く生長はしないが、然し3回目の葉を刈り取った後、第4回目が、握りこぶし状の細くやせたいかにも弱々しい芽を10Cm程もち上げた。この例からも考へられるが、その生長の条件さえ備っておればいつでも若芽も延ばす用意があるといえよう。これはミヤマクマワラビに限らず田圃の畔などで刈られてしまったコウヤワラビやホソバシケシダなど少なくない。すなわち秋の葉が枯れる頃はすでに來春の若芽が、沢山の毛や鱗片をかむって土の面に春を待期している。

さて一方先きの常緑のものはどうかというと、樹木と同じで重たい雪をかむっても緑濃い葉を強健に保ち、雪溶けとともに再びその葉に生命の息吹きをもち返すのである。シシガシラや、イタチシダはその良い例で今なお雪深くその生命を長らえている。

また日溜まりの土手によく見かけるトラノオシダも、シシガシラやイタチシダとは比べものにならぬ柔軟な葉で元氣よく生き残っている常緑の一つだ。

私はこの(2月)19日、三浦半島に採集に出かけた。シダの豊富なことでは知られている神武寺山の谷間では今も夏と変らぬほどにリョウメンシダ、ホソバカナワラビイノデ、ベニシダ、ヘラシダなど大群を成して生育している。暖地のこれを見せられ私はしばしば故郷の雪の野山をしのんだ。そして雪の下、静かに芽ぶくシダを妄想した北アの麓に春遠からず……………と。



日溜りの崖壁にもたれる弱々しくも生き長らえているホウライシダ(暖地のシダ)横浜、金沢八景、神社裏にて。



【写真左】暖地の2月はもう春、すでに4~5cmにのびたフモトカグマの若芽(三浦半島、神武寺山にて)

【写真右】一年間のすべての仕事を了え、静かに土に伏すミゾシダ、もうこの頃には、株の所に若芽が用意されている

黒部川第四発電所

世界的な大工事として注目を浴びている関西電力の黒部川第四水力発電所建設工事は、大町ルートの開通を迎えて、いよいよ本格化してきました。ここに、この工事の概要をながめてみましょう。

北ア地底の難工事

黒部溪谷の奥地、ダム建設地地点の御前沢と大町市とを結ぶ21kmの大町ルートは発電所建設の大動脈であり建設資材のほとんどはこの道路によって運ばれます。この輸送路建設において最大の難所とされた5.4kmのトンネルは、2月25日19時40分、着工後1年8カ月で貫通しました。このトンネルは標高2677mの赤沢岳の地底をぶち抜く大がかりなもので、一昨年の夏富山・大町両側から同時に掘り進められたものです。近代的な機械力によって1日平均12mを掘って日本記録を出した大町側も、昨年の夏から毎秒200~300lも出水する破砕帯に妨げられ、約5ヶ月間、工事ができませんでした。だが本坑の両側に排水坑を掘るなどして、昨年11月には長さ86mの破砕帯を突破したのです。

黒部川第四発電所の概要

○発電力	258,000キロワット
○可能発電量(年間)	13億キロワット時
○ダム	アーチ式ドーム溢流型
(高さ)	186米
(堤頂長)	526.2米
(堤体積)	160立方メートル
○貯水池	
(湛水面積)	3.4平方キロメートル
(満水位標高)	1,448米
(総貯水量)	199百万立方メートル
(有効貯水量)	148百万立方メートル
○発電所	全地下式コンクリート
○主要資材	
(セメント)	57万トン
(鋼材)	1.6万トン
(労務者)	310万人
○工事費	370億円
○工期	
(一部発電)	昭和35年10月 (153,000キロワット)
(竣工)	昭和38年6月



珍しいアーチ式ダム

御前沢出合に造られるダムは高さ186mで佐久間ダムより36m高く世界で第2位、堤長526m、体積160万 m^3 という大きなものです。しかも、日本にはめずらしいアーチ式ダムであり、従来の重力ダムにくらべてコンクリートが少なくすむことが、その美しい型と共に大きな特徴です。重力ダムがダム自身の重みによって横から圧してくる水の力をうけとめるのに対して、アーチダムは上から見て弓なりの形につくり、アーチとして働かせて水の力を支えようとするものであり、その設計には非常な困難を伴い、日本のように地震の多いところでは今まで見られなかったのです。このダムが貯水すると上流面積3.4 km^2 、満水位標高1448mの人造湖ができます。

発電所は洞窟の中

ダム下流10km、東谷の山腹に20万立方メートルの大洞窟を掘って、この中に発電所の全ての設備を収めます。だから発電所は外からは全く見えません。国立公園黒部の風物を傷つけないためと、雪の害を防ぐためです。全地下式の水力発電所は日本で初めての試みであり、世界でも珍しいそうです。この発電所には3台の発電機が据えられる計画です。ダムは33年11月からコンクリートを打ち始め、35年10月に標高186mのうち120mで貯水をおこない、2台の発電機によって発電を開始します。引き続きダムを打ち上げて、37年10月には残り1台の発電機の据付けも終り、258,000KWの発電が行なわれることになっています。この発電所の可能発電量は京都府滋賀県、奈良県の電力使用量に相当するとのこと。

北アの山々が吹雪に暮れる日も「黒四」の建設工事は着々と進んでいます。きょうも幾千の人間が大自然の圧感と闘いながら冬営し作業を続けているのです。

(解説 海川庄一)

＝山博の友＝ 大町山の会 自然に親しみ山を学ぶ

大町山の会は誕生後まだ日は浅い。しかしその活動は、冬の五竜岳遠征、1・2月のスキー会、北アルプス登山史研究などめざましいものがある。

11月下旬互に自然に親しみ山を学ぼうとする若いお叫びにより発足、現在会員は男女25名、市内を中心に遠くは北海道におよぶ。

あくまで独立自営の学究的精神に根ざし、単に山に登るといふことだけでなく常にそこにある四季のよそおいにその神祕と人生の不可思議を無言のうちに語ってくれる自然のおおしい山脈を愛するが故に、この会員たちはたくましく、その夢もいつとなく山の頂谷をかけめぐる。この会の組織運営は会則にもとづき、会長、副会長、会計、常任委員からなり、この常任委員の中に会員全部が分散し、組織、事業、調査、編集、技術の各分野にわか

れて会の運営面に参画する。毎月発行される会報「山」にその研究を発表、すでに三号発刊の運びとなっているが次第に貴重なる山の資料となって来ている。その他、山にまつわる人間の歴史や、文学にあらわれた山の研究、尊い人命が幾度となく消え去ったエレジーに、その自然の驚異への認識と、山男の強いそれへの反抗を以って広い観点から究める遭難史の研究など、山を愛し山に親しもうとする強烈純朴な胸の中に、それ以上の危険と運命を意識するが故にその科学への情熱と日夜の研究に余念がない。若い意気と情熱が山々にこだまして、明日への希望と夢が、岩かげにそっと咲きほこるコマクサにも似て、強く美しく、冬となく夏となく、これら山男、山女たちの身に宿している。やがて春が訪ずれるこゝ山都に、この会の意義は大きく、夏への事業計画、例えばハイキング、山岳講座など勇氣と血潮のたぎる思いがほうふつする。若人よ来たれ、新しい入会者のためにこの会の門戸は常に開いている。

3月のお知らせ

大町山の会

- 3月15日 会報「山」第3号発行
- 3月15、16日 八方尾根スキー合宿(黒麦小屋泊)
- 3月21～23日 出張映画会(北小谷村)
- 3月30日 昭和32年度總會(大町公民館)

山の歌声

- 3月13日 山の歌練習会(大町市公民館)
- 3月27日 " (")

銀河会

- 2月22日 会報「すばる」第4号発行
- 2月24日 定例会「天王星の観測」大町南高

……(新設スキー場紹介)……

＝白馬高原スキー場＝

大糸線森上駅から西山スキー場への途中、白馬連峯の展望の良い部落、新田部落がある。こゝは以前から西山スキー場をバツクに近年は夜間スキー場などを作って宣伝していたが、民宿四十軒は独立した部落のスキー場を持たなくてはというわけで昨年秋西山スキー場の北に1万坪のゲレンデと工費90万円でホール、売店、客室をもつヒュッテ並びに150米の最新式ロープウェイを65万円で新設した。スキー場は初、中級向き、頂上は西山スキー場と同じになる東向き斜面で、今後開発の如何によって大衆スキー場として大きくクローズアップされることだろう。森上駅より徒歩で30分

市内の分館調査

教育委員会、博物館、公民館など、社会教育関係職員で市内の公民館分館の一斉調査を行うことになった。これは3月5日までに行われるもので、本年度社会教育の主眼である分館育成と分館へ進出する巡回映画、巡回図書移動公民館、移動博物館の基礎資料を得ることが目的である。

原稿と山の写真を募集

下記の規定により皆さんの原稿と山岳写真を募ります。ご寄稿をお待ちしております。

記

- ①山岳、スキー、歴史、民俗、考古、風俗、気象、地学、生物に関する調査、研究報告、短報、雑録、紀行文、随想、論説など全般
- ②山岳写真(未発表のもの)
- ③原稿用紙は400字詰を使用し、横書きとする。字数は1500字以内。当用漢字を使用し、できるだけ写真、図をそえること。
- ④山岳写真はキャビネ版。400字以内の説明を加える
- ⑤使用後の原稿および山岳写真は返却しない。
- ⑥原稿の載採、その他編集に関しては編集部に一任する。
- ⑦締切りは毎月10日
- ⑧送り先は長野県大町市、大町山岳博物館「山と博物館」編集部あて

場所によつては天然記念物

オオミズナギドリ

Puffinus leucomelas (Temminck)



紅葉もすっかり散ってしまった頃から口ばしが角型の水鳥がよく博物館にとどけられる「見たこともない鳥で、鴨より大きいし、足が悪いのかウマク歩けない、その上グワーエ、グワーエとやかましく鳴く、めずらしい鳥だ、何と云う鳥かね？」

山国の大町ではたしかにめずらしい鳥で、嵐になどあってまよって、ここに一羽、あそこに一羽と、弱って下りたところを捕われる。この鳥は大洋に生活し、屋間は海面に餌を求めてとびつづけ、夕暮時8時～9時に巣に帰って来る。地上では、脚を真直ぐにたてることができず、脚を曲げてはうようにしてあるき、とびたつ時は、やや斜めになった木の幹を翼や脚、くちばしを利用してよじのぼり、そこから滑翔したり、崖の縁から滑翔したりする。巣は土に孔をほり90～100センチのものが一番多い、巣の奥は入口よりやや広く産座には枯葉等をしく、産卵期は6月～7月中旬までで一巣に一卵である。場所によって天然記念物に指定されている。

資料室

移動博物館など

33年度事業計画決まる

本館は大町市を眼下に見下し、鹿島槍連峯を一望にできる大町公園の高台に新築、移転してから第二年度を迎えようとしている。新年度は32年度に続いて、基礎的施設の充実と館内体制の整備を重点とする方針であるが、教育活動なども昨年以上にますます活発化していく予定である。特に昨年発足した幾つかの博物館関係グループを健全な社会教育関係団体として育成し、地域の一般市民に対しては映画、幻灯などの視覚的方法をとり入れた移動博物館を開設するなど幅広い活動を予定している。主な計画は次のとおり。

1、施設整備

①上水道及び消火栓工事 ②館内間仕切、実習室の整備
③総合的苑地設計 ④黒部自然園開設促進

2、資料収集、整理

①姫川、黒部川流域の植物資料収集 ②山の開発史、登山文化史資料の収集 ③稲作関係、民俗資料の収集 ④全資料の分類整理 ⑤教育用スライドの製作 ⑥16ミリ映画の製作 ⑦黒部水気象調査

3、教育、普及活動

①特別展覧会の開催 ②文化祭 ③月刊紙「山と博物館」の発行 ④居谷里研究報告の発行 ⑤移動博物館の開設 ⑥学校巡回相談 ⑦山の自然科学教室 ⑧日常科学講座開設 ⑨博物館のつどい(自然観察会) ⑩山岳図書室の整備開設 ⑪山岳講座その他

お願い 本紙の購読御希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館宛、ご送金下さい。

大町山岳博物館

(博物館だより)

- 1月22日(水) 公民館主事研修会(公民館講堂) 本館学芸員3名出席
1月24日(金) 多山登山隊出発(大町山の会主催7名参加) 目的地北アルプス五竜岳
1月25日(土) 星をみる会(大町銀河会共催大町南高等学校)
1月27日(月) 山の歌声(山の歌声グループ主催公民館社交室)
1月29日(水) 多山登山隊帰館 報告会(本館講堂)
2月3日(月) オーストリア国立スキー養成所教師ルディ、マツト氏来大
2月6日(木) 山の歌声(山の歌声グループ主催公民館会議室)
2月13日(木) 山岳博物館協議会(33年度予算案事業計画案審議 公民館社交室)

今月の寄贈

ニッコウムササビ1体 東筑生坂

村下生坂藤沢健三 ウミズメ1体 大町市八日町野村昭二郎
ニッコウムササビ1体 大町市源波太田富男 学習院大学山岳部員鹿岳嶮難遺体碑拓本1点 東京都鈴木牧夫1月のプラネタリウム(NO10)1部 東京都天文博物館五島プラネタリウム 信州銘木稀草集外2冊(リフレット) 京都大学木曾生物研究所横内齋 農林博物館々報(NO3)1冊 秋田県農林博物館 GAMS(山岳機関誌3号) 東京都山岳巡礼クラブ 天気予報と天気図(図書)1冊 東京都法政大学出版局 (敬称略)

山と博物館 第3巻第2号 1958年2月20日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 松本市市上町353

信州印刷株式会社